# 将来への提言

2005年度インカレロング実行委員長
永田　秀樹

1.はじめに

　本大会を開催するにあたり、さまざまな問題に直面し、解決に多くの時間を費やした。

私は、あまりマニュアルというものを見ないし、マニュアルがあると、そこに書かれたことしかできなくなってしまうので、むしろ必要ないと思っている。しかし、今後、インカレを運営する人たちに同じ苦労をして欲しくはないので、運営を通じて得た知見や考えを、将来への提言としてここに記す。

2.

2.1 運営者確保

当初、本大会では運営者が不足しており、日本学連を通じて運営してくれる OB/OG を探してもらったことは、覚えている方も多いと思う。

関東の OB/OG が中心となって運営する場合、運営者の確保に苦労することはあまりないのではないかと思うが、それ以外の地区では、運営者の確保が実行委員会の一つめの大きな仕事となってくる。

この状況は、あまり好ましいものではない。本来ならインカレをより良いものにするために充てる時間を、人材集めに費やさなければならないし、それ以前に、担当者がいなければ企画を考えることすらままならないからである。

運営者を集めるにあたって、もっとも苦労したことは、そもそも人を知らないということだ。どこにどのような人材がいるのか、わからなかった。なので声をかけることもできず、日本学連に頼るという結果になった。しかし、その日本学連でも、状況は同じであった。

確かに、学連で、運営してくれそうな人材を把握するというのは難しいと思う。せめて、各加盟校で、運営してくれる OB/OG を把握しておくくらいのことは、できるのではないかと思う。

今回の運営者を集めるにあたって、ある考えを持って声をかけていった。実のところ、何のこだわりも持たずに人を集めていれば、運営者が不足するということも無かったのかもしれない。その考えとは、運営に慣れていない人、特にインカレを運営したことのない人に運営を経験してもらいたいということ、普段一緒に運営していない人と一緒に運営することで、新たなアイデアが出るのではないかということである。

やはりインカレとは、他の大会とは違うものである。運営する側も、こだわり・考えを持って運営したいものである。

2.2 運営ノウハウの継承

こちらも関東ではあまり問題にならないのかもしれないが、関西をはじめとした他の地域では、インカレ運営を経験したことのある人が少なく、運営ノウハウが蓄積されていない。

運営ノウハウの蓄積・将来の人材育成という観点から、未経験者と経験者をペアにした人材配置を行うべきであると考える。特に計センなどは、人材育成が強く望まれる。

また、伊賀インカレの報告書でも述べられているが、インカレの運営資料は実行委員会ごとに個別に管理され、容易にアクセスできる状況にはない。

過去のデータを一括管理することは、難しいかもしれない。せめて、運営資料のリンク集だけでも整備してもらいたいものだ。

3.前日大会での怪我人

今回、前日大会（モデルイベント・トレイル－O・スプリント－O）では、傷害保険をかけていなかった。これは、プログラムに記載していたとおりである。

前日大会はトレイル−O を除いて、当日申込のみであり参加人数が予測できないことと、モデルイベント・トレイル−O に関しては、激しい競技ではないので怪我はないだろうと考えていたため、この方法をとった。

しかし実際には、保険をかけていたロング競技では、大きな怪我の報告はなかったにもかかわらず、前日大会では 3 人もの参加者を病院に搬送するという事態になってしまった。当然、この 3 名には、ロング当日のためにかけていた保険は適用されない。

傷害保険は、一人あたり 30 円程度である。たとえ 500 人分の保険をかけたとしても、15，000 円である。このような事態を想定し、保険をかけておくべきであったと反省している。

4.ジェネシスマッピングとの関係

日本学連とジェネシスマッピングは、切っても切れない関係である。だからと言って、馴れ合いや、外部から見て不明瞭な点があってはいけない。両者の関係は、あくまでも、学生団体と一営利企業であるのだから。

現在の日本学連とジェネシスマッピングとの契約関係は、ブラックボックスである。外部からはその契約内容は全くわからないし、当事者であっても、学連関係者の中ですべてを把握している者が、はたしているのだろうか。甚だ疑問である。

本大会を開催するにあたっても、次から次へと出てくるジェネシスマッピングとの契約に翻弄されることが多かった。大会中には、多忙を極め自ら確認することはかなわなかったが、学連担当者には、ジェネシスマッピングとの契約内容を整理し、加盟員に公開することをお願いしたい。その内容次第では、同社との今後の在り方を考えなければならない可能性もある。その前提としても、まずは、契約内容の全公開が望まれる。

5.最後に

当初は開催すら危ぶまれた大会であったが、他の大会と共催せずに、これだけの大会ができたことは、非常に満足している。今後の可能性も開けるのではないかと考えている。

しかし、もっとも大切なことは、加盟員一人一人が、インカレは自分たちのものであり自分たちで作り上げていくという想いを持つことである。そういう想いを持って、今後もインカレを盛り上げていってもらいたい。